

# 井伏圭介と山根寛齋 一彫金と木工にみる技と美一

2017年12月23日(土・祝) – 2018年4月1日(日) 会場: 常設展示室

※月曜休館 ただし1月8日(月・祝)、2月12日(月)は開館 12月28日(木)-1月1日(月・祝)、1月9日(火)、2月13日(火)は休館  
※学芸員によるギャラリートーク 2018年1月19日(金)、2月16日(金)、3月17日(土)午後2時より

井伏圭介(1930-2006)と山根寛齋(1933-2010)は、日本伝統工芸展を舞台に共に活躍した福山ゆかりの彫金家、木工芸家である。

井伏は、1950(昭和25)年頃から彫金を学び始め、1971(昭和46)年から日本伝統工芸展に出品を始めた。1979(昭和54)年に日本工芸会賞を受賞し、翌年に奨励賞、日本工芸会総裁賞と受賞を重ね、1989(平成元)年には重要無形文化財保持者選賞を受賞。2000(平成12)年に日本工芸会の金工部会長に就任し、金工部会の発展、後進の育成に尽力した。

井伏と3歳違いの山根は、1948(昭和23)年、15歳頃から指物を修行し、1981(昭和56)年に日本伝統工芸展に初入選し、以後、30年近く出品を続けた。後年には、後進の育成や小学校への普及活動などにも励み、2003(平成15)年に広島県指定無形文化財保持者に認定され、2006(平成18)年、旭日双光章を受章した。

井伏が、1945(昭和20)年、父・井伏鱒二の生家、現・広島県福山市加茂町に山梨県から再疎開したことにより、2人に近所どうしのつきあいが始まった。1947(昭和22)年に井伏は家族と共に東京へ戻るが、その後も時おり帰郷、山根の上京時には行動を共にした。また、同じ日本伝統工芸展に出品するようになった2人は、互いの作品制作に刺激を与え合など、終生交遊を続けた。1998(平成10)年には、「広島ホームテレビ文化・スポーツ賞<sup>(1)</sup>」を2人揃って受賞している。

本展では、この2人の日本伝統工芸展の出品作を中心に、彫金と木工にみる技と美を探っていく。

## I 井伏圭介

井伏圭介は、1930(昭和5)年、4人兄妹の長男として東京都杉並区に生まれた。鱒二が中学校卒業後の一時期、画家を志した影響もあり、幼少期から絵画、工芸作品に興味関心を抱くようになった。19歳の頃は、西村伊作が創設した文化学院に学び(中退)、その後、阿佐ヶ谷洋画研究所(現・阿佐ヶ谷美術専門学校)で、6年にわたってデッサンを描いていた。この頃、井伏は、鱒二の焼物趣味から陶芸を勧められたこともあったようだが、「割れるものだから<sup>(2)</sup>」と気乗りしなかったようである。1950(昭和25)年頃、井伏は、刀剣の鍔に興味を持ち、遠藤銘司に師事して彫金家の道を選んだ。25歳の時には、海野建夫に彫金、三上猛夫に鍛金を師事している。

《郁子小筥》(No.1)は、1956(昭和31)年、第12回日展に初入選した井伏の記念作である。当時26歳だった井伏は、自宅の庭に植栽していた郁子の葉やツルをスケッチして図案化した。井伏は、厚さ0.4ミリメートルの薄い純銀板に裏出しの技法を巧みに用いて、葉の文様に奥行き感を表している。木箱本体は、木工家、梅田總太郎が制作したもので、桑の材を用いている。井伏の彫金は、箱の側面を一段彫り下げたなかに嵌め込まれている。銀色の郁子の葉は、透かして見える紺色の玉糸の布地との色の対比で美しく見える。

当時の作品評には、「新人井伏圭介の《郁子小筥》の素直な努力には好感が持たれる<sup>(3)</sup>」とある。また、「日展工芸の佳作を拾う<sup>(4)</sup>」と名打たれた作品評では、他の7つの出品作とあわせて井伏作品について、「小品は、こうした大会場では、うっかり見すぐされ勝だし、それを承知での精進のゆえ、その敬謙な気持ちに打たれる<sup>(5)</sup>」と評された。翌年の第13回日展では、前作の傾向と全く異なった、《ワイヤン》というレリーフ状の抽象作品を出品している。本作は、「井伏等新人の前衛作品数点が各所に散在して、いわゆる日展工芸の型を破っている<sup>(6)</sup>」と評された。日展への出品は、この2回だけであるが、伝統工芸へのひたむきな制作姿勢と従来の型を破ろうとした青年期らしい試行錯誤が窺がえる。

《菊文打出箱》(No.2)は、青森県八戸市の櫛引八幡宮に保存されている、国宝 赤糸威鎧の菊離の



1. 井伏圭介 《郁子小筥》1956年



2. 井伏圭介 《菊文打出箱》1991年



17. 井伏圭介 《斜線文黄葉箱》2002年



4. 井伏圭介《布目象嵌銅香炉》1991年



11. 井伏圭介《布目象嵌銅花瓶》1995年



13. 井伏圭介《布目象嵌透紋銅花器》1996年



21. 山根寛齋《桑造矢絣文象嵌箱》1986年

意匠を元にした、井伏61歳の時の作品である。

井伏によれば、鎧兜復元の際に協力し、その時に調査した技法を拠り所により制作したものだという。井伏は、「菊一文字の鎧兜<sup>(7)</sup>」として広く知られる鎌倉時代末期の鎧兜の菊の意匠に刺激を受けて、純銀の地金に彫金を施した。木部の箱は、井伏が山根に制作依頼したものであった。茶褐色に塗装された桑の空目と銀色の彫金が美しい調和を見せている。

井伏は、第49回日本伝統工芸展に出品した『斜線文黄葉箱』(No. 17)でも山根の制作した木箱を用いている。井伏が72歳の時に制作した晩年の作だが、このような共同作業は、彼が亡くなるまで続いた。山根は、箱の大きさや形状など井伏の求めに応じて図面を引き、互いに仕上がり具合を確認し合うなど、綿密な打ち合わせをして制作していた。

本作も山根の堅牢な木箱に支えられ、井伏の高度な彫金の技に冴えが見られる。黄葉といふし銀の色合いが調和して、宝石箱としての用途を超えた重厚な趣を感じさせる。

『布目象嵌銅香炉』(No. 4)は、第31回伝統工芸新作展の出品作で、井伏61歳の時の作品である。  
布目象嵌とは、素地となる金属の表面に目切鑿で縦、横、斜めに布目状の目(筋)を切って、その上から他の薄い金属を鹿の角、木、金属の鉢や盤を用いて打ち込んで圧着するという、金属の加飾技法の一つである<sup>(8)</sup>。本作には、涙滴の形状のほぼ中央部分に、連窓のような煙孔が設けてある。赤金(金・銅の合金)、青金(金・銀の合金)、銀の幾何学的な配色が、瑞々しい緑青の有機的な文様に映えている。この布目象嵌の技法は、もともと古正阿弥系の彫金や鍔などでも、よく用いられた<sup>(9)</sup>とされるが、鍔の加飾の興味から彫金の道へ入った井伏にとって魅力的な技法であったと考えられる。

およそ2ヶ月かけて制作された『布目象嵌銅花瓶』(No. 11)は、第25回伝統工芸日本金工展に鑑査委員として出品した、井伏65歳の時の作品である。「古代の銅鐸の表面にみる、無欲な造形からヒントを得た<sup>(10)</sup>」という井伏の言葉も残されている。器の側面には、銅鐸にみられる三角形を鎖錠させて表現した幾何学模様、鋸歯文の形を元に毛彫りしている。

この花瓶は、大きく外に張り出した胴と細い首に小さな口が特徴的である。技法は、一枚の銅板を加熱して柔らかくなったり(焼きなました)金属を當て金に當て金槌で打って形を起こしていく、鍛金である。打ち出しと焼きなましを何度も繰り返すなかで形づくられた安定感のある、ゆったりとした器形を生み出している。井伏は、銅鐸の素朴な線画をモチーフに、その銅の表面に布目や線象嵌の技法を駆使して、緑青と金、銀の色彩のコントラストで華やかに仕上げた。

『布目象嵌透紋銅花器』(No. 13)は、第43回日本伝統工芸展に出品した、井伏66歳の作品である。この花器も胴の中央部に鋸歯文を陰刻し、上部の文様をさらに透かし彫りにしている。美しい赤褐色の銅の煮色は、金銀の布目象嵌と調和している。内側から盤で不規則に打出した中央部の突起の形が、星のような輝きを放つて器形に動きをもたらしている。

2006(平成18)年8月15日、井伏は、翌年早々の個展を控えていながら76歳で急逝し、さらなる飛躍を期待していた関係者を悲しませた。遺族の話によれば、井伏は、芸術活動に携わっている人に集まってもらおうという村おこしをすすめていた。山梨県笛吹市に亡くなる2年前から仕事場兼住居を移して制作に励んでいたといい<sup>(11)</sup>、制作意欲は最後まで衰えることがなかった。

## II 山根寛齋

山根寛齋(本名:寛次)は、1933(昭和8)年、2人兄弟の次男として福山市加茂町粟根に生まれた。小学校の頃より、通学の途中で見かける石工、竹工芸、舟大工など、職人の作業に興味をもち始めていた。工作が得意な少年で「小刀で竹とんぼや船をつくるのは、たいていの男の子がやることだが、寛次少年の器用さは凡庸ではなかった<sup>(12)</sup>」と山根の兄、正昭も回想している。暇があれば部屋に引きこもって竹や木端を材料に彫刻を制作する少年だった。当時、山根が最も影響を受けていた彫刻家は、御調町出身の圓鏡勝三であったという。

山根は、商業学校を卒業後、一時期、製粉会社へ勤めていたが、作品制作への思いを断ち切れず、幼い頃から慕っていた井伏鱒二に手紙で相談した。山根によれば、鱒二からの返信は、なかなか来なかったというが、ようやく届いた親宛の手紙に「そりやあ子供の言うようにしてやれ<sup>(13)</sup>」、「彫刻じゃ食うていけんから指物がいいだろ<sup>(14)</sup>」という鱒二の意向に、両親も納得して支援を決めた。1948(昭和23)年に宮大工で指物師の三好正一に弟子入りして本格的に指物を制作することになった。

「指物」とは、板状の素材を組み合わせて成形する技術である。その名の由来については諸説あるが、柄(突起)と枘穴(枘を受ける穴)を作り込むなどして板材・角材を組む際に、「指す」といい、また「物指し」を用いて細工するからともいわれる。木工技術は、指物、削物、挽物、曲物などと分類するがこの指物の技術者を日本では指物師と呼ぶ。山根もその技を取得した一人であった。

1955(昭和30)年、山根22歳の時、鱗二から「寛齋<sup>(15)</sup>」の雅号を受けた。それから5年後の1960(昭和35)年には、倉敷市玉島の修竹軒玉堂に師事して、茶道具制作などの技術を修得した。

山根によれば当時の仕事場では、弟子になつても師匠から直に教えてもらはず、見て盗むしかなかつたといふ。その後、砥石の直しや刃物の砥ぎを徹底的に修得させられ、鉋やノミの取扱い方、削り方を理解することで、制作の基本を学んだ。

1977(昭和52)年には、大野昭和齋に師事し、木創会に入会した。重要無形文化財伝承者養成研修会へ参加して物作りの基本を念頭に杅目の文様を活かす制作技法を学び、中国地方を代表する木工芸家として知られるようになった。

『桑造矢絣文象嵌箱』(No. 21)は、第33回日本伝統工芸展の入選作で、山根53歳の作である。台合せ被蓋造である。指物師、山根の得意とする留置蠟柄<sup>(16)</sup>の組手は、木口も接合部分の組手(木の凹凸)も外から全く見えない方法で、外観の美しさと堅牢さを兼ね備えた技である。縞柿の間に等間隔に配された矢絣文は、着物の文様を巧みに取り入れ、槐、玉椿、朴、黄楊、桜、柿、紫檀<sup>(17)</sup>の7種類の木を用いて象嵌している。台の合せ目に黒柿を使用している。中身は、二段重ねで金欄縞子張りと内装も凝っている。仕上げは、繊細な杅目を生かすために白蟬で磨いている。

『折鶴棚』(No. 25)は、1993(平成5)年、第3回広島県茶の湯工芸展に出品された作品である。同展は、上田宗箇流によって広島県内の工芸家の作品を使って行われたもので、「広島アジア大会に因んで平和を考えらる<sup>(17)</sup>」制作の依頼をされた茶道具であった。本作では、山根も茶会での道具の取り合わせの一つとして熟慮したことが窺える。天地や縦板などに使われた吉野杉には、表面の杅目を浮き上がらせた、「浮造り仕上げ」の技法がみられる。「浮造り」とは、木の表面を軽く焼いて、杅目の固い部分を残し、柔らかい部分をブラシで削る事により杅目の凹凸を強調する技法で、渋い色合いを呈している。縦板には、形を変えた3羽の折鶴を透かし彫りしている。支えとなる2本の竹柱は、2つ節と3つ節のものと節目を変えて立てるなど、一見簡素な造りでありながら変化を見せている。水指など他の道具類を引き立たせようとした意図が感じられる。板の両木口には、板が反るのを防ぐための端檻(木口隠しのために取り付ける化粧の部材)を取り付けるなど、細部にわたるまで神経の行き届いた手技を見せていく。

『朴造木画箱』(No. 27)は、第41回日本伝統工芸展の入選作で、山根61歳の作品である。厚さ10ミリメートルの朴を使用し、波形の木片を象嵌している。木画として使われている木片は、白色が黄楊の木と塗地の木、赤は桜、黒は柿である。朴の木肌の色違いが微妙なグラデーションを呈している。台は神代櫻で、天の角から台の合わせは斑柿である。翌年にしづや美術館で開催された「木工芸・指物 山根寛齋回顧展」の図録『年輪』の表紙には、本作の部分(拡大)が使用された。隙間なく組まれた木画が、山根の高度な木工技術を物語っている。

『桑杅造扇箱』(No. 28)は、第43回日本伝統工芸展の入選作である。材には、島桑、真柏(ヒノキ科)、桐と3種類の木を用いている。天板や側板には、隠岐産の島桑が使われている。この材は、山根が知人より譲り受けたもので、45年以上前に伐採<sup>(18)</sup>し、寝かされた狂いの少ない材である。山根によれば、穏やかな環境で育った桑と強風が吹きつける島で育った桑とでは、杅目が全く異なるといふ。扇形の中箱は、真柏(ヒノキ科)が使われている。また扇形の透かし窓からは、色味の異なる真柏が見える。内部は、柱状の桐が使われていて、棚を支えている。窓枠は、地を彫り下げた浮彫である。中箱は、この窓から押し開けるようになっている。天板は、やや甲盛をつけて、見た目のバランスを考えて仕上げられている。中箱の棚は、一つずつ高さを変えて、茶道具などの小さな物を収めることができる。収納した際の端正な器形と、中箱のユニークな動きが好対照をみせている。

『櫻筐杅十角箱』(No. 30)は、第45回日本伝統工芸展の出品作である。山根は、櫻の筐杅と呼ばれる、緻密な杅目を持った材の魅力を十分に生かして制作した。側面の板と天板が、柄でしっかりと組まれて一体感のある器形となっている。蓋の下の部分は、黄楊の木など波形に合わせてミシン鋸で引いた部材を膠で順番に埋めていく木画という技法が採られている。堅い板を曲線に引くのは困難な作業で、1日で2本程度の割でしか部材が確保されない<sup>(20)</sup>。下部の描いたように見える繊細な部材の形は、鋸引きの途中で折れたりして、何度も制作し直す中でようやく出来た形であった。完成した作品の静謐さからは想像も出来ないが、苦闘を積み重ねられた末に生み出されたものであった。

『朴造十二角箱』(No. 31)は、第46回日本伝統工芸展の出品作である。天板と側板に朴を材に使い、上隅には、棗を巡らしている。土台は神代櫻が材に使われている。この神代櫻は、岐阜県の長良川堤防の修復工事の際に800年の時を経て掘り出された貴重な材である。側板の文様は、線象嵌によって異なる材を埋め込んで表現している。細い横縞は、黄楊、黒柿、神代櫻が美しい層を呈している。三角形の模様をアクセントに入れた黒い横線は、黒柿、線の内側は黄楊で象嵌



25. 山根寛齋『折鶴棚』1993年



27. 山根寛齋『朴造木画箱』1994年



28. 山根寛齋『桑杅造扇箱』1996年



30. 山根寛齋『櫻筐杅十角箱』1998年



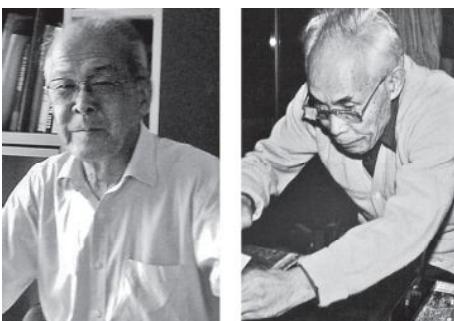
31. 山根寛齋《朴造十二角箱》1999年



34. 山根寛齋《玉椿柿渋上十角箱》2002年



37. 山根寛齋《櫻杢拭漆箱》2005年



井伏圭介 (1930-2006)

山根寛齋 (1933-2010)

(21) して作品の形態を引き締めている。

『玉椿柿渋上十角箱』(No. 34)は、第49回日本伝統工芸展の出品作である。本作は、玉椿のみを材としている。それまでの出品作にみられるように、多種類の材を巧みに組み合わせた指物の作品を制作してきた山根にとって、あらたな試みであった。この作品では、雇柄という組み方を用いている。雇柄とは、隣接する2枚の材の間に、別材をたたき込んで埋め込み接合(固定)する手法である。内側には、懸子(箱の縁にかけて内側に仕込む底の浅い箱)が付いている。仕上げの塗装に使われた柿渋は、福山市松永で絞られた柿渋を数十回塗り重ねて仕上げた。柿渋は、漆に比べて発色が薄く、つや消しとなるため、杢目が見やすいという理由で選択された。山根によれば柿渋で仕上げた作品の入選は、本工芸展史上初めてであった<sup>(22)</sup>といふ。

『櫻杢拭漆箱』(No. 37)は、第52回日本伝統工芸展の出品作である。本作は、杢目を生かしつつも加飾を抑えた、四角い簡潔な器形を際立たせている。天板の几帳面と角や蓋のあわせ目には、黒柿の縁が廻されている。この縁が、櫻の杢目の美しさを際立たせている。黒柿の堅い縁は、作品を保護する機能もある。複雑な杢目は、木の纖維が不規則に向いていたため、色々な方向からできるだけ薄く鉤がかけられ、漆の染み込み方も一様ではない。それだけに微妙で美しい色彩のニュアンスが表れている。過酷な生育環境で育った木の一生<sup>(23)</sup>を活かした、山根の力量が感じられる作品である。

この頃の山根は、日本伝統工芸展の関連行事として企画された出張授業にも数多く関わった。広島県内の子どもたちに伝統文化に直接触れてもらおうと、同展の実行委員会が企画したものであった<sup>(24)</sup>。山根は、作品をはじめ、実際に使用している道具類なども数多く持参し、子どもたちに鉤掛けの実習にあたってもらうなど、授業を通して自身の体験を語り伝える労を惜しまなかつた。

1988(昭和63)年には、西ドイツ(当時)ハノーバー市へ文化交流のため茶道具を寄贈するなど、海外に日本の木工芸を紹介するという貴重な役割も担った。

山根は、2010(平成22)年3月14日、井伏の逝去から4年後、77歳で逝去了。同年2月の広島県立美術館で開催された第56回日本伝統工芸展には、闘病中の身でありながら『櫻造嵌装箱』を出品する。「人より良いものを目指した。前作より次の作品が劣るようではいけない。私は職人だから<sup>(25)</sup>」と常々語っていた。後世に木工の伝統技術を伝えたいという信念を最後まで貫いた謙虚で折り目正しい人柄の木工芸家の姿がそこにあった。

### III 彫金と木工にみる技と美

井伏は、布目象嵌や線象嵌をはじめとする伝統技法を継承し、現代に活かした彫金家であった。『金工の伝統技法<sup>(26)</sup>』などの技法書を香取正彦、井尾敏雄らと共に著し、金工界を牽引した。金銀を用いた華やかな花器、香炉など魅力あふれる作品は、多くの工芸ファンを魅了した。

山根もまた、木工芸のなかでも、伝統的な指物の技を礎に、和額から盆、棚、屏風などの茶道具、木画箱などを制作した。多様な木材の特質を知りつくし、茶会の道具など、用途に応じて材を吟味し、形、大きさなど約束ごとを調べ上げた上で図面を引いた。その安定感のある作風は、木工界の関係者をはじめ多くの鑑賞者を唸らせた。

半世紀にわたって技に磨きをかけた2人は、用と美を探求し、その伝承と発展に終生力を注いだ工芸家たちであった。

(学芸課次長 大前勝信)

#### 註

- (1) 「文化・スポーツ賞に5人 広島ホームテレビ」『朝日新聞』1999年2月27日。
- (2) 本展開催準備にあたって、戸川鯉子(井伏圭介 長女)のインタビューにもとづく。
- (3) 美術街編集部『日展総走記』『日展史 19』社団法人日展、1987年、490頁。
- (4) (5) 「日展工芸の佳作を拾う」同書(「萌春」昭・31・11)、495頁。
- (6) 未吉菊丸「日展の工芸」「日展史 20』社団法人日展、1988年、416頁。
- (7) 南部一之宮・櫛引八幡宮ホームページ「櫛引八幡宮の文化財」より。
- (8) (9) 北村仁美「布目象嵌の清新な味わい」「人間国宝53」(朝日新聞社、2007年、16頁)を参照した。
- (10) 「自作の花瓶寄贈 ふくやま美術館に井伏圭二の長男圭介さん」『毎日新聞』1995年11月21日。
- (11) 本展開催準備にあたって、戸川鯉子(井伏圭介 長女)の取材インタビューにもとづく。
- (12) 山根武氏(山根寛齋 長男)より資料提供「山根寛齋講演会設立準備 趣意書」および、山根の兄、山根正昭氏の取材インタビューにもとづく
- (13) (14) 「あの人」山根寛齋氏「備後美術」アート印刷株式会社、2004年1月、1頁。
- (15) (16) 「山根寛齋略歴」「木工芸・指物 年輪」山根寛齋 1996年、9月。
- (17) 上田宗源「茶会の道具」「第3回広島県茶の湯工芸展図録」財団法人上田流和風堂、1993年10月、3頁。
- (18) 福田浩子(広島県立美術館)「匠の美 日本伝統工芸展から」『朝日新聞 備後 24』1997年2月1日。
- (19) 本展開催準備にあたって、宮本真希子氏(広島県立美術館)には、生前の山根寛齋のことを見た、技法全般にわたって懇切な教示をいただいた。
- (20) 村上勇(広島県立美術館)「美との対話 県立美術館企画展だより 銘木が描く繊細な文様」「産経新聞 備後 22」1999年1月31日。
- (21) 福田浩子(広島県立美術館)「土台に800年続いた神代櫻使用 第46回日本伝統工芸展 広島展から」『朝日新聞 備後 24』2000年1月19日。
- (22) 福田浩子(広島県立美術館)「緊張感生む直線的形 第49回日本伝統工芸展 広島展から」『朝日新聞 備後 1・2』2003年1月25日。
- (23) 宮本真希子(広島県立美術館)「美しい杢目すきな木箱」『山根寛齋 櫻杢拭漆箱 第52回 日本伝統工芸展』『朝日新聞 備後 13』2006年1月27日。
- (24) 「かんなぎ削りできたよ」福山津之郷の山根さん招き出張授業 備後 136『山陽新聞』2005年10月15日。
- (25) 長曾我部誠「悼記 指物に込めた感性と手業」『中国新聞』2010年3月22日。
- (26) 香取正彦、井尾敏雄、井伏圭介「金工の伝統技法」理工学社、2006年7月31日(第16刷)。

## 第1室：井伏圭介と山根寛齋

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	所蔵
1	井伏圭介	(1930-2006)	郁子小筥	1956	銀, 打出, 桑	8.7 × 30.8 × 14.5	
2	井伏圭介		菊文打出箱	1991	銀, 打出, 桑	10.0 × 22.3 × 9.5	
3	井伏圭介		布目象嵌銅香炉	1991	銅, 象嵌	13.0 × 10.5 × 10.5	
4	井伏圭介		布目象嵌銅香炉	1991	銅, 象嵌	12.8 × 10.5 × 10.5	
5	井伏圭介		布目象嵌銅花瓶	1992	銅, 象嵌	21.0 × 16.0 × 16.0	
6	井伏圭介		布目象嵌銅花瓶	1993	銅, 象嵌	19.0 × 19.5 × 19.5	
7	井伏圭介		布目象嵌黃銅花瓶	1993	黃銅, 象嵌	13.0 × 15.5 × 15.5	
8	井伏圭介		布目象嵌純銀花瓶	1994	銀, 象嵌	27.5 × 15.5 × 15.5	
9	井伏圭介		布目象嵌鍛鉄接合花瓶	1994	鉄, 象嵌	25.0 × 25.0 × 25.0	
10	井伏圭介		布目象嵌接合銅花瓶	1995	銅, 象嵌	20.0 × 20.0 × 20.0	
11	井伏圭介		布目象嵌銅花瓶	1995	銅, 象嵌	15.0 × 19.0 × 19.0	
12	井伏圭介		布目象嵌黃銅花瓶	1995	黃銅, 象嵌	20.7 × 20.7 × 20.7	
13	井伏圭介		布目象嵌透紋銅花器	1996	銅, 象嵌	27.5 × 15.5 × 15.5	
14	井伏圭介		線象嵌黃銅香炉	1997	黃銅, 象嵌	11.5 × 11.0 × 11.0	
15	井伏圭介		線象嵌黃銅花瓶	1997	黃銅, 象嵌	25.0 × 23.0 × 23.0	
16	井伏圭介		布目線象嵌鍛鉄花瓶	1997	鉄, 象嵌	20.0 × 15.0 × 15.0	
17	井伏圭介		斜線文黃藁箱	2002	銀, 黄藁	13.0 × 24.0 × 12.0	
18	井伏圭介		布目象嵌銅花瓶		銅, 象嵌	19.0 × 19.0 × 19.0	ふくやま文学館
19	井伏圭介		布目象嵌黃銅花瓶		黃銅, 象嵌	20.0 × 11.0 × 11.0	ふくやま文学館
20	井伏圭介		布目象嵌鍛鉄香炉		鉄, 象嵌	11.0 × 9.0 × 9.0	ふくやま文学館
21	山根寛齋	(1933-2010)	桑造矢絣文象嵌箱	1986	桑, 象嵌	14.0 × 17.8 × 29.0	
22	山根寛齋		八繫象嵌八角箱	1992	神代櫻, 象嵌	12.0 × 23.3 × 23.3	
23	山根寛齋		神代櫻造箱「夕凪」	1993	神代櫻, 象嵌	15.6 × 27.0 × 13.6	
24	山根寛齋		へぎ八寸盆	1993	杉	2.3 × 24.3 × 24.3	
25	山根寛齋		折鶴棚	1993	杉, 竹	33.4 × 48.5 × 37.0	
26	山根寛齋 (腰)杉谷富代		吉野杉潮文染風炉先屏風	1993	杉, 染	63.5 × 189.4	
27	山根寛齋		朴造木画箱	1994	朴, 象嵌	15.2 × 27.0 × 15.8	
28	山根寛齋		桑杢造扇箱	1996	桑	20.5 × 25.5 × 25.5	
29	山根寛齋		櫻造箱	1997	櫻	17.5 × 30.5 × 15.0	
30	山根寛齋		櫻杢李十角箱	1998	櫻, 象嵌	13.0 × 24.5 × 24.5	
31	山根寛齋		朴造十二角箱	1999	朴, 象嵌	12.3 × 22.5 × 22.5	
32	山根寛齋		桑造箱	2000	桑, 象嵌	13.5 × 25.9 × 13.6	
33	山根寛齋		櫻杢李造文箱	2001	櫻	11.4 × 26.4 × 15.4	
34	山根寛齋		玉椿柿渋上十角箱	2002	椿	11.5 × 24.2 × 24.2	
35	山根寛齋		朴造柿渋上飾箱	2003	朴	25.5 × 19.4 × 19.4	
36	山根寛齋		桑渋上掛子透彫文箱	2004	桑, 象嵌	12.3 × 26.5 × 17.5	
37	山根寛齋		櫻杢拭漆箱	2005	櫻, 緋柿	12.4 × 21.0 × 21.8	

## 第2室：日本の近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	所蔵
38	高橋秀	(1930-)	ブルーボール # 101	1971	油彩, カンヴァス	142.0 × 190.0	
39	饗嘔	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0 × 45.0 × 50.0	
40	山口長男	(1902-1983)	堰形	1959	油彩, 合板	183.0 × 274.0	
41	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7	
42	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とピンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7 × 45.8	
43	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩, カンヴァス	45.0 × 36.0	

## 第2室：日本の近現代美術

\*印は、寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
44	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9 × 41.0
45	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2 × 24.8
46	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10頃	油彩, カンヴァス	72.3 × 53.0
47	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩, カンヴァス	48.5 × 59.7
48	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩, カンヴァス	90.9 × 72.7
49	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝	1932頃	油彩, カンヴァス	65.5 × 80.5
50	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3 × 72.8
51	小磯良平	(1903-1988)	西洋人形	1970-75頃	油彩, カンヴァス	71.5 × 59.5
52	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩, 板	41.0 × 32.0
53	狩野尚信	(1607-1650)	瀧燕図	17世紀中頃	紙本着色淡彩	112.2 × 22.0
54	狩野柳圓久信	(17-18世紀)	花鳥図屏風	17世紀末頃	紙本着色	126.0 × 330.0
55	松本陽子	(1936-)	荒野での試み	2010	油彩, パステル, 木炭, カンヴァス	194.0 × 259.0
56	高松次郎	(1936-1998)	形 (No.1201)	1987	油彩, カンヴァス	218.0 × 182.0
57	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1931	油彩, カンヴァス	53.1 × 65.0
58	中村琢二	(1897-1988)	瀬見の女 (雪国の女)	1958	油彩, カンヴァス	116.5 × 91.0
59	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0 × 13.0 × 11.0
60	樂吉左衛門	(1949-)	黒樂茶碗 銘夜聴	2003	陶	9.3 × 13.0 × 13.0
61	樂宗入 (樂家5代)	(1664-1716)	赤樂茶碗 銘老葉子	江戸時代	陶	8.2 × 10.3 × 10.3
62	樂道入 (樂家3代)	(1599-1656)	赤樂茶碗 銘紫翠	江戸時代	陶	7.8 × 13.5 × 13.5
63	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄	45.0 × 78.0 × 46.0
64	土谷武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0 × 57.5 × 41.5
65	野田正明	(1949-)	可能性	2005	ブロンズ	50.0 × 49.0 × 40.0

## 第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
66	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4 × 46.0
67	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0 × 65.0
68	モーリス・ユトリロ		雪のラパン・アジル	1916頃	油彩, カンヴァス	50.1 × 62.5
69	マルク・シャガール	(1889-1985)	青い村	1981	油彩, カンヴァス	24.0 × 35.0
70	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0 × 22.0
71	パブロ・ピカソ		近衛騎兵 (17, 18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0 × 60.0
72	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5 × 51.8
73	フィリッポ・パリッティ	(1818-1899)	ザンボーニャ奏者	1862	油彩, カンヴァス	70.0 × 60.0
74	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0 × 87.0
75	メダルド・ロッソ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0 × 30.0 × 17.0
76	ウジェーヌ・カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩, カンヴァス	46.0 × 38.0
77	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコニー氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0 × 47.0
78	クルト・シュヴィッタース	(1887-1948)	抽象19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5 × 49.8
79	ジャコモ・バッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0 × 60.5
80	ジョルジオ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0 × 60.0
81	ソニヤ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0 × 220.0
82	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0 × 150.0
83	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念—銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0 × 50.0
84	ピエロ・マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0 × 50.0
85	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風 (踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0 × 80.0 × 90.0